

子どもの命を守る

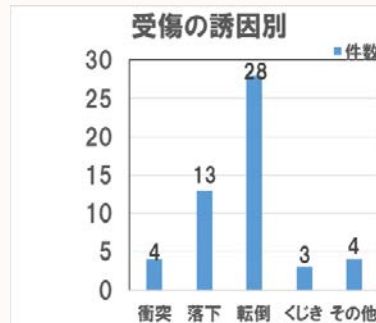
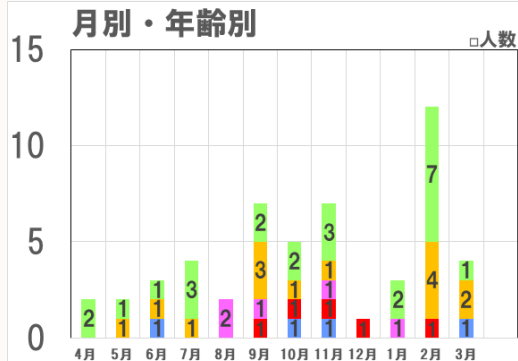
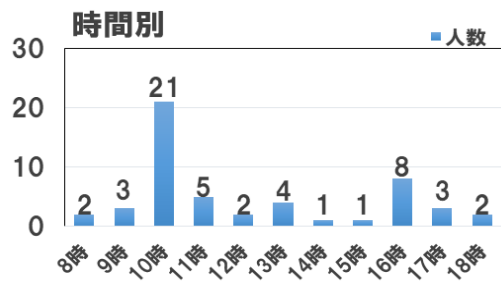
骨折事故から学ぼう！

巡回訪問つうしん16号
令和4年1月発行

令和2年度の本市の事故のうち「骨折事故」が多く報告されました。データをもとに事故を客観的に振り返り、保育環境を見直し、自園の事故予防に向けた対応について考えてみましょう。

令和2年度 横浜市内の骨折事故について

下記のグラフは、横浜市に提出された令和2年度の事故報告137件のうち、特に多かった『骨折』52件をグラフ化しています。骨折事故を、時間別、曜日別、月別年齢別、受傷の誘因別にしていきます。



令和2年度の骨折事故は、保育活動時間の10時台と16時台に多く、月別では2月、曜日別では火曜日に多く発生しています。受傷の誘因としては、転倒が圧倒的に多いという集計結果でした。



受傷の誘因・その状況について

骨折事故の「受傷の誘因」をさらに状況や年齢別に詳しく見ると、人や物をよけきれず事故につながったケースが、特に多くみられました。

受傷の誘因	状況
衝突	・他の子にぶつかって転倒・走って正面衝突
落下	・ぶら下がりの健康器具（公園）・鉄棒・ボルダリング ・切り株・ブランコ（公園）・マット（厚さ15cm） ・本棚・雲梯・複合遊具・滑り台の階段
転倒	・テラス段差・側転・ジャンプ・走って・芝生上 ・鬼ごっこ中・人、物をよけきれず ・着地失敗（固定遊具含む）・馬飛び・玩具を持って ・保育士にぶつかる・ボール・玩具につまずいて
くじき	・テラスの段差・足場が悪い場所、でこぼこ道
その他	・タイヤに腕を挟む・跳び箱で自分の体重が手に乗る。 ・ボールで突き指・跳ね返ったボールにぶつかる



よい保育環境のために

骨折事故の要因の中には、ヒューマンエラー・コミュニケーション不足が含まれていました。子どもの遊びを過度に制限せず、子ども一人ひとりの主体性を尊重する保育を行うために、保育者一人ひとりが考え、園・施設全体で話し合しましょう。

- ◆園の環境に合ったマニュアルや子ども・保育者が理解したルールを職員間で共有
- ◆子どもの視点に立った環境
 - ・一人ひとりの思いや行動を場面ごとに理解し、子どもの興味や関心の察知等を保育者間で確認し合い、保育者の位置、声かけ等、子どもの行動を予見した対応をしましょう。
 - ・成長発達に合わせた遊びを工夫し、園全体の計画にも生かしましょう。
 - ・「静と動」の遊びの分け方を工夫し、スペースの確保等により子ども同士の衝突・転倒を防ぎましょう。
- ◆子どもの見守りの「隙間」「空白」（子どもの見失い）をつくらぬよう、保育者間で連携
 - ・異年齢合同の活動では、個々の子どもの状況を把握した配慮や連携が必要です。
 - ・遊具の高さ、着地する部分などがどのような状況かを事前に理解し、日常の安全点検や落下予防等、声を掛け合い子どもを見守る役割を明確化しましょう。
- ◆子ども自身の事故回避力を高めることが重要
 - ・遊びの場面での注意喚起や安全に関する指導（安全教育）、子どもとの話し合いにより、遊具の使用方法についてルールを設けることなどを検討しましょう。
- ◆リスクコミュニケーションで学び合う
 - ・リーダーが人材育成（OJT）や研修等を行い、保育者が活動中に予測するべきリスク全体を職員間で共有し、学び合いの中でスキルアップを図りましょう。

【参考】教育・保育施設等における重大事故防止策を考える有識者会議年次報告（令和元年）～「骨折」をテーマとした提言～参照

